

近世日本の享保期における商人学校の登場と武士階級の商業への関心

李 惠 薰¹⁾

1.序

17世紀後半、日本は体制的には武士が支配する社会だったが、構造的にはお金が支配する社会に進入していた。貨幣が鑄造され市場に出る瞬間、鑄造権者の統制を離れ、富の分配、消費、貯蓄、投資の決定において、武士の政治的権威はますます市場に主導権を奪われていた。貨幣の分配と資本の蓄積は巨大な多層的利害関係を形成し、政治的権威の恣意的統制の幅を狭めた。

初期資本主義の様相としてもよいこのような構造変化の過程で社会的持分を増やしたのは商人であった。都市化により生産者と消費者をつなげなければならない流通需要が急増した日本では他の地域(朝鮮,中国)、さらにはヨーロッパに比べても商人階層の浮上が目立った。

商人が富を蓄積し、社会主導勢力に成長すると、近世日本社会は矛盾に封着する。商人階級層が生産と消費を媒介する主体として社会機能の重要な軸を担うようになったが、士農工商に基づく近世日本の身分観念では、商人が依然として最下級層とみなされる一種の認知的不協和(cognitive dissonance)現象が発生したのであった。

士農工商の中で最も微賤な身分である商人がお金を稼いでよく暮らす姿を扱う他の階層の認識は認めておらず、特に武士たちは不満はすごかった。商人自らが社会的要求があるから自分たちが存在し富を蓄積するのだが、身分的に依然として蔑視の対象になることに対する自壊感があったのも事実である。

江戸時代の農本主義(または生産者中心)観念のもとで生産に直接参加しない商人たちの利潤追求は、他人が汗を流して生産した結果物を「右から左に移して」利益を偏取する行為で治った。商業の利益獲得は肥沃なものとされ、武士たちは商業に従事することを「恥」と規範化した。この時期に韓国(朝鮮)、中国はもちろんヨーロッパにもなかった大事件が発生する。まさに商人(町人)たちの学校が登場したのである。儒教文化圏である韓国人の立場から見ると、これは確かに享保期の大事件だが革命的発想であり、朝鮮,中国だけでなくアジア世界での世界史的イベントともいえる。

ウェーバー,(Max Weber:1864-1920)は『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神,(Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus,1905)』と『儒教と道教,Konfuzianismus und Taoismus,1915』などにおいて、ピューリタニズム(Puritanism)と儒教の合理主義を比較、中国において儒教の合理主義はあったけれどピューリタンの合理主義が不十分だったため、西欧のような近代資本主義が発生しなかったとして、一定の倫理が与えられれば、その倫理に適した経済が出現するしかないという有名な歴史的解析を行った。

ウェーバーは、儒教は自己抑制を人々に要求するが、原罪の観念も来世への志向もない、俗人たる士大夫によって信奉される儒教は、ピューリタニズムの持つ厳しい内面的倫理が欠如してい

1) 韓南大学 名誉教授, 前 韓南大学 総長, 元 大韓経営学会長.

ると批判している。儒教と儒教文化を西洋の尺度で評価するウェーバーの流れは、近世の享保時期である日本を見れば、その見解を覆すしかない。

2. 巨大資本と豪商の登場と關所(けっしょ)処分

江戸時代の日本はヨーロッパのような資本主義による自由階級としての商人の生成ではなかったが、他の東洋諸国と比較にならないほど大都市の商人階級は大きな商人資本を成し遂げた。17世紀後葉から18世紀初頭にかけての元禄年間(1688年-1704年)、新興の大商人が現れた。この時代は、文治政治への転換により幕藩体制がいつそうの安定期を迎え、三都とりわけ京・大坂を中心とする上方の経済・文化の繁栄が頂点に達した時期に相当する。大坂の蔵元であった淀屋は蔵物の出納で富を得、店頭で米市が立つほどの殷賑を誇ったといわれ、井原西鶴が『日本永代蔵』にその繁栄ぶりを記しているが、宝永2年(1705年)、淀屋の五代目の淀屋廣當(よどやこうとう)が22歳の時に幕府の命により關所(けっしょ)処分となった。廣當の通称である淀屋辰五郎の關所処分として有名である。關所時に没収された財産は、金12万両、銀12万5000貫(小判に換算して約214万両)、北浜の家屋1万坪と土地2万坪、その他材木、船舶、多数の美術工芸品などという記録が有る。また諸大名へ貸し付けていた金額は銀1億貫(膨大に膨れ上がった利子によるものであるが、現代の金額に換算しておよそ100兆円)にも上った。關所の公式な理由は「町人の分限を超え、贅沢な生活が目余る」というものだった。しかし諸大名に対する莫大な金額の貸し付けが本当の理由であろうとされている。

3. 1724年(享保9年)懷徳堂--町人の学校-官立

元禄以降、大坂の町中において儒学への関心がたかまり、享保9年(1724)5月、三星屋武右衛門・道明寺屋書左衛門・舟橋屋四郎右衛門・備前屋吉兵衛・鴻池又四郎の町人五同志が、尼崎町1丁目(現在の大阪市中央区今橋三丁目)の道明寺屋の持ち家に学舎を建てた。そして11月に初代学主として、享保9年(1724)の三宅石庵を迎え、この学舎は懷徳堂と名づけられた。懷徳堂開設当初の教授陣は、学主三宅石庵・預入中井齋庵・五井蘭洲であり、並河誠所・井上赤水も助けた。

このとき懷徳望の玄関の壁にかけられた定書には、学問は主君への忠、親への孝という基本道徳や職業を勤めるためのものとし、講釈は書物をもたない者でも聞いてよく、中途退席も可という。懷徳堂が新設されたのは、江戸時代の中期(1724年)、武士支配社会に当時の学校といえば武士の学校を言うもので、商人(町人)の学校という言葉も取り出せない時期に商人による商人のための学校で 出発した当時はあまりに異色的な存在だったといえる。

大阪商人が懷徳堂を建てる過程は容易ではなかったが、中井齋庵は今の東京である江戸に行き、5ヶ月待って許可を得て2年後の1726年、8代将軍徳川吉宗から公認されて敷地を受けた。幕府からの公認は受けたが、財源は商人が引き続き調達し、以後も町人の学校の性格を維持した。

18世紀当時、商人(町人)の学校が建てられたことと、これを幕府が許してくれたのも、おそらく世界的にも非常に珍しい現象であり、商人のパワーがあらわれた間接的な表象といえる。

18世紀当時の階級では士農工商の最下位階級だが階級を打破することはできないが商人たちはお

金を持っていたので知識を満たして闕所(けっしょ)処分を免れると同時に学識のある商人としての位置を探したかったと思う。それで彼らが悟ったのは学校を作ること学問的立場での商人階級の武士階級と知的同等化(平等化)として出発した。

4. 1729年(享保14年)石田梅岩----心学講舎-町人の学校-私立

石田梅岩は1692年、8歳で京都の商家に丁稚奉公し、20代前半、京都の「黒柳」という布木商に再就職し、販売業に従事した彼は遅く出発したが、勤勉さと誠実さを認められ、42歳の年に番頭に上がる。1727年には黒柳家を辞し、1729年(享保14年)45歳で自宅に講席を設け、生涯を布教に努めた。梅岩の講義は受講に際して紹介が一切不要、かつ身分や男女を問わず、無料で講義を聴くことができた。

当時は士農工商の制度の中で最下層に位置していたのが商人であり、商人が得た利益は、何も生産せず悪知恵で得たものとの理由で、社会からは軽蔑されていた。商業の正当性を主張し、商人に誇りを持たせ、蔑視の対象であった商人の商いを「商人道」として哲学にまで押し上げたのであった。石田梅岩は「真の商人は先も立ち、我も立つことを思うなり」とし、現代の顧客満足の重要性を強調した。

彼の思想は『都鄙門答』という著書で見られる。

「商人の買利天下お召しの禄なり。それを汝、独り売買の利ばかりを欲心にて道なしと云い、承認を憎んで断絶せんとす」。石田梅岩の代表作「都鄙(とひ)問答」の有名な一文である。商人が儲けるのは社会に貢献した報酬であり、これは武士がもらう俸禄と同じで、商人が存在しなければ、社会全体が成り立たないばかりか、国家が減ぶとまで主張する。

江戸時代の商人出身の町人学者、石田梅岩の思想と生活哲学が近世東アジアの普遍的思想であった朱子学ないし性理学から出発したが、身分と商人の価値である利益と武士の奉録を共にしたのは、東アジアの価値思想と全く異なる発想といえる。

▶朝鮮時代儒教の立場から、それまで賤しいとされた“商人の職業と商人の得る利益”を、正当化したものと(商人)利益と(武士)奉録を同等化(平等化)したのは、商人と武士(朝鮮:士大夫、兩班)の同等化につながり、これは革命的発想であり、世界史的イベントといえる。

心学講舎は弟子の増加により、1773年に修正士、1779年に時習史、1782年に明倫社の教師を変更しながら心学運動の普及に努めた。手島堵庵(1718年~1786年)中沢道二(1725-1803)、布施松翁(1725年~1784年)柴田鳩翁(1783年~1839年)など弟子たちの努力で1700年代半ばから幕末までの100年余で45カ国、173カ所に設立され、商人をはじめ町人・農民から武士・大名に至るまで幅広くその教えを学んだ。

5. 武士階級の経済への関心-経世家の登場

いわゆる儒教文化圏という韓国(朝鮮)と中国、日本を比較する際、韓国と中国で理解しにくい点は、近世日本で登場した経世家という言葉であると思う。儒教思想に基づく経世済民の理論を基底として、現実の政治、社会、経済問題に対する処方箋として、経済論、改革論などが展開される。「世を経(を)さめ、民(たみ)を濟すくふ」意味は三国がみんな同じだが、日本では経世論をより具体的にすなわち市場経済に近づけて接近したということにその特徴がある。

*韓国、中国は“経国済世 - 国を治め、人民を救うこと-”意味が強く政治家的立場である。

▶日本では経世家-(精選版 日本国語大辞典,参考)

① 世の中を治めることに長じた人。政治家(a statesman, an administrator)

※『平和』発行之辞(1892)〈北村透谷〉「吾人は政論家として若くは経世家として」

② 江戸時代、経世の論、あるいは具体案を説いた知識人。

--江戸時代、経世済民の具体策を説いた在野の知識人-も含む。

▶江戸時代における政治経済論者の総称。儒教思想に基づく経世済民の理論を基底として、現実の政治、社会、経済問題に対する処方箋として、経済論、改革論などが展開される。

5-1. 1727年(享保 12 年) 荻生徂徠の『政談』

荻生徂徠は幕政の危機に際し、その問題点と対策を論じ、参勤交代の廃止、武士と町人・百姓との分限に即した諸制度の確立、銭貨の大量鑄造、人材の登用などを幕府要人の諮問に答える形式で説く。第8代将軍徳川吉宗に呈上したものと伝える。

▶古文辞学によって解明した知識をもとに、中国古代の聖人が制作した「先王の道」(「礼楽刑政」)に従った「制度」を立て、政治を行うことが重要だとした。徂徠は農本主義的な思想を説き、武士や町人が帰農することで、市場経済化に適応できず困窮(「旅宿の徒」)していた武士を救えようと考えた。

▶吉宗に提出した政治改革論『政談』には、徂徠の政治思想が具体的に示されている。人口問題の記述や身分にとらわれない人材登用論は特に有名である。これは、日本思想史の流れのなかで政治と宗教道徳の分離を推し進める画期的な著作でもあり、こののち経世思想(経世論)が本格的に生まれてくる。服部南郭をはじめ徂徠の弟子の多くは風流を好む文人として活躍したが、『経済録』を遺した弟子の太宰春台や、孫弟子(宇佐美瀧水弟子)の海保青陵は市場経済をそれぞれ消極的、積極的に肯定する経世論を展開した。

▶孫子国字解

5-2. 1729年(享保 14 年) 太宰 春台の『経済録』

太宰春台は鎖国時代の江戸中期に先見的な鋭い洞察力を持つ主要な経世家だった。彼は経世論を発展させ、武士も商業を行い、転売制度により利潤を創出しなければならないと主張した。著書には『経済録』、『経済録拾遺』、『産語』などがあるが、日本で初めて「経済(経済)」という言葉を使ったのが書いたという²⁾。

特に『経済録』の場合、日本で初めて本のタイトルに「経済」という言葉が使われたことで有名

2) 武部善人(1991)『太宰春台転換期の経済思想』、御茶の水書房

だ。しかし、当時の「経済」という言葉は、現在の「経済」の意味ではなく、むしろ「政治的」の意味で使われていたとしても過言ではない。むしろ俊大が使用した「食化」という言葉が現在のeconomy意味で使われていると見なければならぬ。

春台は、職責（勤め）のためにも市賈（商い）が必要だと主張する。

凡今ノ諸侯ハ、金ナクシテ国用足ラズ。職責（ツトメ）モナリガタケレバ、只如何ニモシテ金ヲ豊饒ニスル計ヲ行フベシ。金ヲ豊饒ニスル術ハ、市賈（アキナイ）ノ利ヨリ近キハ無シ。諸侯トシテ市賈ノ利ヲ求ルハ、国家ヲ治ル上策ニハアラネドモ、当時ノ急ヲ救フ一術ナリ。

金がなければ国に必要なことができず、職責も果たすことができないため、商いをして利益を求めろという。そのためには制度が重要であり、金銀を増やすべきだと主張する。そのためには、〈金銀ヲ豊饒ニスル術ハ、市賈ヨリ近キコト無シ〉と考えられている。そのとき、〈諸侯其国ノ土産ヲ以テ、他所ニ市賈センニ、何ノ憚ル所アランヤ〉と語られているように、商売をしなければならぬと主張するのは当時は画期的な発想だったといえる。

6. 結

近世日本の享保期の商人たちの動きは、懐徳堂を始まりに動かした。当初は商人も幕府から認められようと官立学校の懐徳堂を建立し、商人と武士の知的な面での同等化(平等化)を主張したが、石田梅岩の心学講舎と彼が講義したことを後に書いた都鄙門答では、商人の利益と武士の奉録は同じだという職業での商人と武士の同等化を主張したのである。

そして享保期で武士たちの商業への関心で登場したのが荻生徂徠の情談と太宰春台の経済録なのに、特に経世家が武士と農業、武士と商業への関心を持つのも、この時期の朝鮮時代では登場しないのだから、途方もない発想だと思う。

享保期の学校の設立と武士たちの商業への関心は商業の発展と商人の努力で朝鮮、中国とは全く違う新しい近世資本主義初期の形態を備えたと思われる。